

氏 名	田原 大資
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第666号
学位授与年月日	令和7年3月19日
審 査 委 員	主査 教授 藤田 幸
	副査 教授 林 健太郎
	副査 准教授 荒木 亜寿香

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

大脳皮質基底核変性症（CBD, corticobasal degeneration）は、中枢神経系の神経細胞やグリア細胞にリン酸化タウが異常蓄積する神経変性疾患であり、関連疾患との臨床的鑑別が困難なため確定診断には病理学的検索が必須である。病理学的に確定されたCBDの臨床的特徴についての先行研究は欧米からのもので、本邦では稀である。本研究では、本邦における病理学的に診断確定したCBD症例の臨床的特徴を検討した。症例数は31例（男性16名、女性15名）で全例が日本人だった。発症年齢は平均63.3歳、死亡年齢は平均69.1歳、全罹患期間の中央値は6.0年だった。臨床病型は、進行性核上性麻痺症候群を呈した症例が20例（64.5%）で最も多く、次いで大脳皮質基底核症候群が6例（19.4%）、前頭葉性行動空間症候群が4例（12.9%）、原発性進行性失語非流暢性/失文法型が1例（3.2%）だった。また経管栄養が22例（71.0%）で施行されており、経管栄養施行群は非施行群と比べて有意に全罹患期間が長かった（ $p = 0.013$ ）。本研究により本邦のCBD症例の臨床的特徴として、進行性核上性麻痺症候群を呈する症例が多いことが示唆された。また本研究では、これまで十分に検討されていなかったCBD症例における経管栄養の臨床的効果が検証されており、経管栄養による生存期間延長効果が示唆された。本研究は、本邦のCBDの臨床像を明らかにした貴重な報告であり、今後のCBD診療に資する重要な臨床病理学的研究と位置付けられる。